

A・MUSEUM

vol.68
[2011.9.15]



ミュージアムパーク
茨城県自然博物館



やなにかかった那珂川の落ちアユ

落ちアユ—新しい世代へ向けて—

夏の余韻よゐんが残る季節、野山や水のなかでは生きものが次の世代に命をつなぐ準備をはじめます。アユもそのひとつです。春、海から遡上そじょうするときには10 cmほどだった若アユは、夏の間、中流域で水生昆虫の幼虫や付着藻類かちやくそうるいなどを食べ、この時季には20 cmを超える大きさに成長しています。夏至げしを過ぎ、日が短くなって水温も下がってくると、からだに変化が生じ、餌えさの豊富な中流域から産卵場となる最下流の瀬へと川を下りはじめます。いわゆる“落ちアユ”です。落ちアユは、からだ全体が黒みを増し、大雨による出水などが刺激となって集団で小石や砂の間に卵を生み付けます。産卵を終えた親アユは傷だらけになり、1年の生涯を終えます。そして約2週間後、ふ化したアユの赤ちゃんは海に流れ下ります。(資料課 増子勝男)



小石に生み付けられたアユの卵

第53回
企画展

科博コラボ・ミュージアムin茨城

恐竜発掘

—過去からよみがえる巨大動物—

The world of dinosaur hunters —Digging up the huge animals—

近年、世界各地で恐竜類をはじめとする巨大動物化石の発見が相次いでいます。恐竜類の調査は、古くはアメリカの古生物学者マーシュとコープによって展開された古生物学的命名競争が有名ですが、現在では日本国内でも17道県から恐竜類の化石が発掘されており、ほかに海生爬虫類、鯨類、束柱類、ゾウ類などの巨大動物化石が発見されています。茨城県内でも、北茨城市でみつかった体長10mを超えるムカシオオホホジロザメ化石などの巨大動物化石が発掘されています。

今回の企画展では、これらの巨大動物化石について、その発掘調査から、その後のクリーニング作業、同定、復元などの数々のステップを紹介するとともに、さまざまな分野で明らかになった研究成果を紹介します。ぜひ、姿を消していった巨大動物たちの不思議な生態や進化の謎にふれ、発掘現場のおもしろさを感じてください。
(資料課 国府田良樹)



アロサウルス (所蔵: (独)国立科学博物館)

展示構成

- プロローグ 巨大動物化石大集合
- 第1部 巨大動物を発掘する
- 第2部 姿を現した恐竜たち
- 第3部 よみがえる巨大哺乳類
- エピローグ 発掘は続く



クビナガリュウ (フタバズキリュウ)
(所蔵: いわき市石炭・化石館)

ムカシオオホホジロザメ上顎歯・下顎歯

束柱類 (デスマスチルス)
(所蔵: 足寄動物化石博物館)

ナウマンゾウ

海に進出した鯨類 (パシロサウルス)
(所蔵: 福井県立恐竜博物館)

サーベルタイガー (スミロドン)

会 期 2011年10月8日(土)～2012年1月9日(月)
開館時間 9:30～17:00まで (入館は16:30まで)
休 館 日 毎週月曜日
※10月10日(月)・1月9日(月)は開館し、翌日が休館。
※12月28日(水)～1月1日(日)は休館。
※1月2日(月)は開館し、振替休館はありません。

●自然講座「最新恐竜学」
日時: 2011年10月8日(土) 13:30～15:00
場所: 博物館内
対象: 小学生以上 (小学生は保護者同伴)
定員: 300名 (先着順)
講師: 真鍋 真氏 ((独)国立科学博物館研究主幹)

●自然観察会「恐竜時代の地層を観察しよう」
日時: 2011年10月30日(日) 10:30～14:30
場所: 群馬県神流町 (現地集合)
対象: 小学生以上 (小学生は保護者同伴)
定員: 30名 (抽選)
参加費: 大人900円 / 子ども (中学生まで) 500円
(保険料と神流町恐竜センター入館料)

●自然講座「折り紙でティラノサウルスをつくろう」
日時: 2011年11月27日(日) 13:30～15:00
場所: 博物館内
対象: 小学生以上 (小学生は保護者同伴)
定員: 30名 (先着順)
講師: 池田 整氏 (折り紙愛好家)

科博コラボ・ミュージアム in 茨城は、国立科学博物館賛助会員からの支援を受けております。

ジュニア学芸員育成事業の歴史

～ジュニア学芸員10年を振り返って2～

今回は自然に関する研究や博物館に関心をもっている中学生や高校生が、博物館を利用し、自分でテーマを決めて学習や研究ができる当館の「ジュニア学芸員」制度のこれまでの活動を紹介します。

ジュニア学芸員育成事業がはじまった理由

当館には毎年約40万人の来館者があります。特に幼稚園、小学校の子どもたちは、平日は遠足で、休日は家族連れでたくさん来館します。しかし、その子どもたちも中学生になると、校外学習等で来館する以外、博物館を利用することが少なくなっているのが現状です。そこで、自然博物館としての特徴を生かして、自然に対してより関心をもって活動する機会を提供し、中高生に積極的に当館を利用してもらおうと平成13年度からはじめたのが、この事業です。

現在までの活動

ジュニア学芸員としての基本的な活動は、学芸員から助言を受けて各自のテーマで研究をおこなったり、観察会でのアシスタントをつとめたり、さまざまな調査に同行したりすることです。

ここで、主だった活動を二つ紹介します。

- 環太平洋博物館国際シンポジウム・ジュニアフォーラムへの参加（平成16年度）



第1期ジュニア学芸員の活動

国際シンポジウムの一部として開催されたジュニアフォーラムにおいて、当館のジュニア学芸員をはじめとして、大阪市立自然史博物館のジュニア自然史クラブのメンバー、当館と姉妹館であるロサンゼルス郡立自然史博物館のスチューデントボランティアなど、博物館で活動する日米の中高生が、それぞれの博物館での活動内容や、将来の夢などを語り合いました。

- ニュージーランド派遣事業への参加（平成19年度）

ニュージーランド子ども大使派遣事業として、ジュニア学芸員4名がニュージーランドへ渡り、ニュージーランド国立博物館テ・パパ・トンガレワや環境保全局ファンガレイキーウィ保護区などを訪問しました。

今後に向けて

これまでジュニア学芸員に認定された人数は136名にのぼります。OBのなかには、当館の展示解説員となっている人や、大学院で博物館学を専攻し、当館のジュニア学芸員制度を研究対象にした人、ジュニア学芸員として行った研究をきっかけとして大学等で研究を行っている人などもあります。

今後は、彼らOBとの交流や10年間の活動の振り返りなどをとおして、さらに充実した活動をめざしていきたいと考えています。（教育課 石田容之）



平成16年度環太平洋博物館国際シンポジウム・ジュニアフォーラム

ボランティア活動の成果

この度、ボランティア野鳥チームの「博物館園内11年間の野鳥調査結果報告」が上梓され拝見する機会を得ました。

11年間にも及ぶ日頃の地道な調査活動の積み上げにより、当館野外での野鳥の実態が明らかにされました。この調査に参加され、そして報告書としてまとめられましたボランティアの皆様のご芳苦に、心より敬意と謝意を表する次第であります。

鳥の実態調査は、経験を積んだ観

察者が定期的に定点で長期間にわたり継続することが大切で、根気ややる気なければできないことですが、それを見事にやりとげられました。地球温暖化等による環境変化が進むなか、自然の今の姿を科学的な方法で調べ、後世に残すことが大切です。博物館でも、計画的に総合調査をおこなっていますが、今回の調査記録は、基礎資料として貴重なデータであり、今後各方面で活用されるものと思います。ボランティアの皆様の

コラム by director SUGAYA

ますます益々のご活躍をご期待申し上げます。



イラスト：太田有香（ミュージアムコンパニオン）

企画展から生まれた研究

～研究ノート1～

自然に関する研究は、研究室での実験や野外での観察から生まれるものばかりではありません。博物館の展示がきっかけで、研究論文が生まれることもあります。

昨年度の2010年10月9日から2011年1月10日にかけて開催した企画展「筑波山ーブナとガマと岩とー」は、ご覧いただけましたでしょうか。そこでは、筑波山の地質や動植物、さらには人との関係や歴史まで、筑波山に関する、ありとあらゆることを紹介しました。

私はこの企画展のメンバーとして植物のコーナーを担当するなかで、筑波山の植物研究の歴史について展示することになりました。そのなかで最も気になったのは、「一番はじめに筑波山の植物を研究したのは誰か」ということでした。

当館が1998年に発行した「第1次総合調査報告書」には、『筑波山の植物に関する最初の論文は……H. Ahlburgによる「Eine Reise nach dem Tsukuba」である.』と書かれています。日本語に訳すと「筑波山への旅」というタイトルのその論文は1879年（明治12年）に発行されたGartenfloraという学術雑誌に掲載されたものでした。しかし、その詳しい内容は、他のどの文献にも書かれていません。Ahlburg（アールブルク）博士は100年以上前の筑波山で、どのような植物をみたのでしょうか。その論文を調べ、展示するため、国立科学博物館の協力を得てGartenfloraをお借りすることが叶いました。重厚な古めかしい背表紙と色褪せた紙のその雑誌は、手に取るだけでも歴史の重みを感じるものでした。

タイトルから想像がついていたことではあったのですが、論文は全文ドイツ語でした。ドイツ語の素養がなく困っていた私を助けてくれたのは、当館のボランティアでした。100人を超えるボランティアは人材の宝庫です。そのなかの一人、山川稔氏は、ドイツでの研究経験があり、ドイツ語に堪能な昆虫の免疫学の研

究者です。さっそく論文を翻訳してもらおうと、さまざまな興味深いことがわかってきました。現在の筑波山でも個体数が少ないトキノキやシナノキを観察したことがはっきりと書かれていたほか、これも最古の記録になる下妻市砂沼の植物についても記述されていました。また、アールブルク博士が蒸気船を使って江戸川を北上し筑波山の付近まで旅したことや、26歳で来日し、その翌年に筑波山に登り、さらにその翌年に赤痢に感染して28歳の若さで急死してしまったといった彼自身の数奇な運命も、ほかの文献調査と合わせて明らかになりました。

文章で後世に残してこそ、研究は価値を発揮します。企画展の終了後、これらの結果は「筑波山の植物を初めて報告したドイツ人招聘教授ヘルマン・アールブルクについて」と題し、山川氏を中心に論文にまとめました。この論文は、今年発行される茨城県自然博物館研究報告第14号に掲載される予定です。

研究から展示へ、また展示から研究へ。少しでも新しく興味深い研究と展示をめざし、学芸員として努力を続けていきたいと思えます。（資料課 鴫沢美穂子）



アールブルクの論文（所蔵：(独) 国立科学博物館）

みんな歯がいのち

皆さん、歯を大切にされていますか。

当館には歯の化石がたくさん展示されていますが、それぞれ、さまざまな特徴があります。例えば肉食恐竜のティラノサウルスの歯は、縁に細かいギザギザがあります。これは肉を切りさいたり、獲物に突きさしたりするのに適したつくりです。

また、私たちにもある臼歯という白状の歯は、植物などをすりつぶして食べるのに適していて、植物食の

動物によくみられる特徴です。ゾウのなかまは、犬ぐらいの大きさからマンモスのような大型のものに進化しました。その際、臼歯の形が大きな洗濯板のように変化しました。これは、葉以外の固い枝なども食べるためです。またゾウのなかまの臼歯は、生え替わりの際に形状が変化するため、そこから年齢も推定することができます。

歯は、食べていたもののほかにもさまざまなことを教えてくれます。

小さな発見ーミュージアムコンパニオンー

ご来館の際には、ぜひ歯に注目してみてください。

(ミュージアムコンパニオン 諏訪由香利)



ティラノサウルスの鋭い歯

幼稚園児向け体験プログラムを実施しています

～研究ノート2～

当館では、平成22年度より、幼稚園向け体験学習プログラム開発事業をおこなっています。平成22年度は試行の年と位置づけ、土浦市と坂東市にある三つの幼稚園の協力を得て、体験学習プログラムを実施しました。実施したのは、「ダンゴムシふしぎはっけん!」、「はっばであそぼう」、「はっばでエコバックづくり」、「いしにえをかこう」の四つのプログラムです。そのプログラムのなかで、「ダンゴムシふしぎはっけん!」の取り組みについて紹介します。

「ダンゴムシふしぎはっけん!」の活動のねらいは、身近に生息するダンゴムシと野外の雑木林を利用し、園児に自然のなかで生きものにふれさせ、自然に対して興味・関心をもたせることにあります。

まず、野外に出かけて地面のようすを観察します。次に、ダンゴムシを探しにいきます。園児自らダンゴムシを探すことで、ダンゴムシにいろいろな特徴があることに気づくことができます。続いて、「ダンゴムシわりばしウォーキング」や「ダンゴムシレース」を行います。このことで、生きものを身近なものとしてとらえることができます。最後にダンゴムシと遊んだ感想を発表します。これは、ダンゴムシと遊んだ楽しさを今後の自然観察に生かせるようにするためです。

園児とともに活動した先生方から、体験学習プログラムに対して次のような意見がありました。

- 園児が身近に生息するダンゴムシを自ら採取して活動したことで、興味関心の継続がはかれたと思う。
- 遊びをとおして身近な生きものと触れあうことができたことがよかった。
- 園児とともに、先生もダンゴムシに関心をもてた。
- ダンゴムシだけではなく、ほかの生きものに興味をもつきっかけづくりができたのではないか。

ダンゴムシは、多くの園児が興味・関心をもつ動物ですが、指導者側としては身近にいることはわかっていても生態がよくわからない生きものといったところでしょう。ダンゴムシを詳しく説明することに重点を置きすぎると、指導者の活動の楽しさを半減させてしまうおそれがあります。指導者も園児とともに生きものを使って遊びながら、私たちは生きものと共生しているという流れで自然体験ができるプログラムを進めていくことが大切であると感じました。

今後も、幼稚園の遊びをとおした活動のなかで、園児の心に残る科学的体験学習が展開できるようなプログラムを提供していきたいと考えています。

(教育課 湯本勝洋)



わりばしウォーキングでダンゴムシのからだのつくりを観察する園児たち



ダンゴムシレースで遊ぶ園児たち

ナマズ

皆さんは、「ナマズが地震を予知する」という話を聞いたことがありますか。よくテレビなどで、ナマズの予知能力について紹介されていることがあります。これは、江戸時代にナマズが大地震を予知したという記録があり、そこから伝わってきた話です。近年、ナマズの異常行動と地震の関係を研究している方もいます。しかし、はっきりとした関係はみつかっていないのが現状で、地震を予知できるかは、未だ謎に包ま

れた状態なのです。

ナマズは、繁殖期に雌雄が絡み合う独特の行動をとったり、エサを探す際に左右に頭を振ったりするようですが、何かを予知して暴れているようにもみえます。これらの姿をみた後、地震が起きれば勘違いするかもしれません。

もしかしたら、ナマズの地震予知能力は勘違いからきた幻なのかもしれません。当館でも湖沼の水槽でナマズを飼育していますが、地震前に

おさかな通信

は反応なし。給餌の際はエサを求め必死に泳ぎ回りますけどね。

(水系担当 大森教弘)



ナマズ

青木章八チヨウ類コレクション

～収蔵品紹介～

青木章八氏は、1928年に長野県塩尻市しおじりに生まれました。少年時代を信州の山村で暮らした青木氏は、捕虫網を持ち歩く先生に憧れを抱くようになり、手作りの網で虫捕りをするようになります。1954年に東京都の理科教員となりますが、少年時代にひきつけられたチヨウへの思いはさめることなく、就職3年目には校内に「昆虫クラブ」をつくるほどでした。このころの活動のようすなどをまとめたのが著書「蝶に魅せられて一都会での育て方観察のしかたー」（1988年、光陽出版）です。そして、「蝶研フィールド」「月刊むし」などにも、多くの論文を投稿します。また、標本をつくり整理することも好み、それは亡くなる2010年まで続けられました。

青木章八チヨウ類コレクションは、故青木章八氏の集めた日本産チヨウ類の13,715個体および蛹殻さなぎがら4箱か

らなる標本で、ご遺族の青木つね氏より寄贈されました。均整のとれた標本類は、ただそれだけでもみるものを圧倒し、青木氏の几帳面さが感じられます。晩年は採集データも整理され、完結することはできませんでしたがファイルにまとめられています。

標本の中には、国の天然記念物に指定される前に採集されたウスバキチヨウやアサヒヒヨウモン（ともに環境省指定準絶滅危惧種、北海道指定希少野生動植物）などがあります。現在は採集することができませんから、標本でみられる数少ない個体といえます。

青木氏のチヨウ類標本は、当館の貴重な財産として未来永劫大切に保管されます。博物館は、現代の資料を次世代に受け継ぐ役割を担っています。

（資料課 久松正樹）



動物収蔵庫に収められた青木章八コレクション



国指定天然記念物のウスバキチヨウ

秋の七草と絶滅危惧植物

秋の七草といえば、ハギ・オバナ・クズ・ナデシコ・オミナエシ・フジバカマ・アサガオです。ハギはヤマハギ、アサガオはキキョウ、オバナはススキ、ナデシコはカワラナデシコを指していると考えられています。秋の七草は春の七草とちがひ、食べるためではなく見て楽しむものです。

秋の七草の由来は、山上憶良やまのうえのおくらが万葉集で詠んだ2首の歌「秋の野に 咲きたる花を 指折り かき数ふれば 七種の花」、ななくさ「秋の花 尾花 葛花 瞿麦の花 女郎花 また 藤袴 朝貌の花」ふじばかま あさがおであるとされています。以前は、野原の草を刈って、茅葺きの屋根の材料にしたり、牛などの飼料にしたりするなど、野原を資源として活用していました。ススキなどの植物が大きくなる時期には、野原に秋の花がいっぱい咲いているようすがみられました。昔は、そのようすを歌に詠んだり、姿を愛でたりすることがおこなわれていました。

草が使われなくなると、野原が少しずつ変わってきました。樹木が増えて森林に変わり、背の低い植物に光が当たりにくくなりました。さらに、近年の土地の開発で生育地である野原が少なくなっています。この

ため、以前は時期が来るとよくみられた秋の七草ですが、ナデシコ、オミナエシ、キキョウやフジバカマは、その数が減ってきて、現在はあまりみられなくなってしまいました。特に、キキョウとフジバカマは環境省の絶滅危惧植物に指定されています。

来年3月からはじまる企画展では、絶滅危惧植物をテーマとして取り上げます。どうぞご期待ください。

（資料課 野堀秀明）



キキョウ



フジバカマ

トピックス

○博物館の修繕と野外開館

2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震において、当館は震度6弱の揺れにみまわれました。建物に大きな被害はありませんでしたが、2階の空中通路と柱との接合部分には多数のヒビが入り、コンクリートが剥がれ落ちてしまいました。

今後、同様の地震があった場合の再発防止のため、第51回企画展「46億年の旅路の果てに一隕石がみてきたもの」の終了後、6月13日から修繕工事を実施しました。工事期間中、安全性を図るため、6月13日から19日までの期間は館内への入館を制限し、野外施設のみの開館としました。

まず、接合部のヒビに対しては、エポキシ樹脂を注入し、ヒビを修復し、塗装をおこないました。コンクリートが剥がれ落ちた部分に対しては、コンクリート躯体を炭素繊維で包み込み補強することで、より粘り強い構造体をつくり、このことにより、地震時にコンクリートが圧縮破壊し、剥がれ落ちるのを防止しました。修繕工事は6月27日に無事終わることができました。

これからも当館では、安全第一で快適な空間の提供を心がけていきます。(管理課 眞柄智博)



館内補修工事の様子

○「昆虫研究発表会」を開催しました

第52回企画展「昆虫 大冒険」の開催を記念して、7月24日(日)に「昆虫研究発表会」を開催しました。

昆虫を研究する大人と子どもが一堂に会して、互いの研究を発表しようという内容で、子ども代表として、平成22年度の科学研究作品展(県展)において昆虫に関する研究で入賞した小中学生が、大人代表として、(独)農業生物資源研究所で昆虫に関する研究をおこなっている研究者が発表をおこないました。

前半は、子どもたちによる発表がおこなわれました。どの研究も、身近な疑問を晴らすために地道な努力を重ねてきた、素晴らしい内容のもので、参加者や研究者からも感嘆の声があがっていました。後半の発表では、成長ホルモンや生体防御のしくみなどに関する先端研究について、研究者の方々がわかりやすく話して

くださり、子どもたちも目を輝かせて聞いていました。

参加者からは、小中学生が研究者からの質問に堂々と受け答える姿に感心したという感想が多くありました。きっと、この子どもたちの中から未来の昆虫博士が誕生することでしょう。(教育課 石田容之)



水戸市立国田中学校生物研究部の皆さんの発表

○入館者750万人達成しました

2011年8月5日(金)の午前、当館の入館者が750万人に達しました。

記念すべき750万人目のお客様となったのは、千葉県柏市在住の小学6年生、一戸満里奈さんです。一戸さんは、双子のお姉さんとともに取手市のおじいちゃん、おばあちゃんの家遊びに来た際、4人で来館しました。

これを祝して行われた記念式典で、一戸さんは菅谷館長から入館証明書を交付され、正式に750万人目として認定されました。そして、駆けつけた方々とともにくす玉割りを行い、さらに、茨城県教育次長と博物館友の会会長からは記念品の贈呈を受けました。

750万人目となったことについて一戸さんは、「びっくりしました。」と話し、「博物館に来るのは6回目です。恐竜をみたり宇宙を感じたりするのが好きです。」と続けてくれました。

当館は、1994年11月の開館以来、毎年およそ40万人のお客様にご利用いただいております。これからもたくさんのお客様にお越しいただけるよう、楽しいイベントや展示を行っていきます。(企画課 富永敬之)



750万人目の一戸満里奈さん(右から2人目)

名人芸に酔いしれる



会場を虫の鳴き声で包み込む江戸家猫八師匠

第52回企画展「昆虫 大冒険－タケルとケイの不思議な旅－」の記念イベントとして、動物の声帯模写名人の四代目江戸家猫八師匠をお招きし、8月7日に「江戸家猫八師匠による虫の鳴き声聞き会」を開催しました。300名を収容できる会場の映像ホールは、満員となった参加者の期待と熱気で満ちあふれていました。前座として、当館の久松正樹首席学芸主事が「鳴き虫」と題して昆虫にまつわるさまざまな話を披露し、会場を盛り上げました。そして、いよいよ猫八師匠が登壇すると、会場からは大きな拍手がわき起こりました。はじめに、身近な鳴く虫であるコオロギやスズムシ、鳴く虫の女王とされるカンタンの鳴き声を、さまざまなエピソードも交えながら演じられました。そして、鳴き方教室では、参加者が師匠のまねをしながら、口笛や指笛などでさまざまな音を奏でました。最後に、唱歌「ふるさと」の音楽にのせて師匠が紡ぐ動物の鳴き声には、参加者皆が一心に聴き入りました。

鳴きまねをとおして語られる、地球環境や自然との共存・共生についてのお話から、自然とのつきあい方を改めて考えさせられました。参加者の皆さんからは、「師匠の虫の声に心が癒されました。」「師匠の生きものに対する研究心がすばらしいと感じました。」などの感想が寄せられました。参加者の皆さんには、虫の鳴き声を堪能ただけでなく、自然の大切さも実感していただけたことでしょう。

忙しい日々をお過ごしの方も多いと思いますが、時には虫の声に耳を傾けて、季節を感じてみてはいかがでしょうか。
(教育課 湯本勝洋)

編集後記

今年の夏は節電のためクーラーの設定温度を高くし、蒸し暑い日々を過ごされた方も多いのではないのでしょうか。次回の企画展は「恐竜発掘」です。昨今、地球温暖化が話題となっていますが、恐竜が生息していた時代は、今よりもっと暑かったのだとか。恐竜は当然クーラーにあたってなどいなかったわけですから、暑さに弱い私としては、恐竜を少しは見習わなければいけないのかなと思いました。(M.S)

【交通案内】



＜車ご利用の場合＞

- 常磐自動車道谷和原ICから20分
- ＜鉄道・バスご利用の場合＞
- つくばエクスプレス守谷駅下車
～関東鉄道バス「岩井行き」又は「猿島行き」乗車
～「自然博物館入口」下車、徒歩5分
- 東武野田線愛宕駅下車
～茨城急行バス「岩井車庫行き」乗車
～「自然博物館入口」下車、徒歩10分



【開館時間】

9:30から17:00まで
(入館は16:30まで)
※ベット及び遊具、テーブル、椅子、テント等のお持ち込みはご遠慮ください。

【入館料】

区分	本館・野外施設		野外施設のみ	年間パスポート
	企画展開催時	通常時		
大人	720円 (580円)	520円 (420円)	200円 (100円)	1,500円
高校・大学生	440円 (300円)	320円 (200円)	100円 (50円)	1,000円
小・中学生	140円 (70円)	100円 (50円)	50円 (30円)	300円

(注):()内は団体料金(20名以上)

未就学児・満70歳以上の方・障害者手帳をお持ちの方は入館無料です。次の日は入館料が無料です。

- 5月4日(みどりの日) ●6月5日(環境の日)
- 11月13日(茨城県民の日) ●春分の日
- 高校生以下の児童・生徒は毎週土曜日
(ただし、春・夏・冬休み期間中を除きます。)

【休館日】

- 毎週月曜日
- ※9月19日、10月10日(月)は開館し、翌日が休館となります。
- ※12月28日(水)～1月1日(日)は、休館となります。
- ※1月2日(月)は開館し、振替休館はありません。



自然博物館ニュース A・MUSEUM(ア・ミュージアム)

A・MUSEUM (AMUSEMENT+MUSEUM)

企画・編集ミュージアムパーク茨城県自然博物館企画課/発行2011年9月15日
〒306-0622 茨城県坂東市大崎700番地 TEL0297-38-2000 FAX0297-38-1999
URL <http://www.nat.pref.ibaraki.jp/>
E-mail webmaster@nat.pref.ibaraki.jp
メールマガジンも配信中。登録はホームページから

ミュージアムパーク茨城県自然博物館は、誰もが親しめ、誰もが楽しめるア・ミュージアム(アミューズメント+ミュージアム)をめざしています。